

ぎんれい句会

平成二十八年十二月

触診と按摩ねんごろ吊し柿

主宰

細野恵久

福祉三期

映ゆ紅葉湖面染めけり山も染め

増田和子

食文一期

失せる齒に別れ時なり北時雨

改正節夫

国際三期

塗り替えし鉄人2号小鳥来る

藤井秀重

生環四期

海神の旅立つ闇や汐木燃す

三枝邦光

美工五期

芸猿の一途なひとみ冬の月

國永靖子

音文六期

忘年会三途を見たる友二人

猿橋二三雄

福祉八期

陽は高く風舞ひ舞ひて花八手

加藤善巳

美工八期

霜月の異次元音叉穴の中

太田 實

国際十期

隠沼こもりぬやふつくら集ふ冬の鳥

今崎良平

音文十四期

心きめ皮の手袋きゅつとはむ

大下絹子

国際十五期

青空に被網かふせあみうつ枯樺

中村建生

国際十五期

借りた傘返す道中時雨くる

藤本武子

国際十五期

木の実降る山の径抜け景開く

山下 進

国際十五期

白樺の抑留日記寒三日月

許斐國照

食文十五期

冬うらら近江の銘菓巡りけり

小淵政子

健福十六期

着ぶくれてバイク郵便旧街道

水島麗子

国際十六期

日の匂うふとん引き寄せ鼻理む

兼清久子 健福十七期

身の芯を正す筋トレ干し大根

宮本公子 健福十七期

【第九】より「STAND ALONE」古稀しはす沖本无边子国際十七期

旅終えて点る門灯枯芙蓉

香春早苗 国際十七期

ダムの湖に眠る石棺木の葉雨

仲田慎輔 国際十七期

萩枯れて親亀子亀池の華

中村富美子 国際十七期

極月や千の観音千の相さが

宮本眞貴子 国際十七期

群青に染む天空や冬の雁

江間れい子 園芸十七期

かぞへ唄思ひ出せずに十二月

小栗恭子 健福十八期

炉の煙長押の槍も燻したり

潮江敏弘 健福十八期

虎落笛眠れぬひと夜旅の宿

野見山剛 健福十八期

境内へ落葉分厚き裏参道

大山吉春 国際十八期

星空を仰ぎ見てみる大海鼠

今井義和 美工二十期

ぎんれい句会について

ぎんれい句会は、シルバーカレッジ第一期生として在学中だった俳誌「ぐるっけ」主宰品川鈴子先生に俳句の手ほどきを受けた同期生が卒業後すぐ平成九年四月に上げた句会で、その後次々に同窓の俳句愛好者を加えて今日まで月一回の句会を続けてきました。

鈴子先生には引き続きご指導を賜りましたが、平成十五年からは第三期生で「ぐるっけ」同人会長の細野恵久先輩が代って指導を引き受けておられます。

その間、平成十八年に第百回記念の、また平成二十六年には第百回記念の合同句集を発刊、句会の足どりをささやかながら形として残しました。

なお今回ご紹介する作品は第二百三十二回の句会からの一人一句です。